

特 207

353

岡部宗城述

正信偈入門

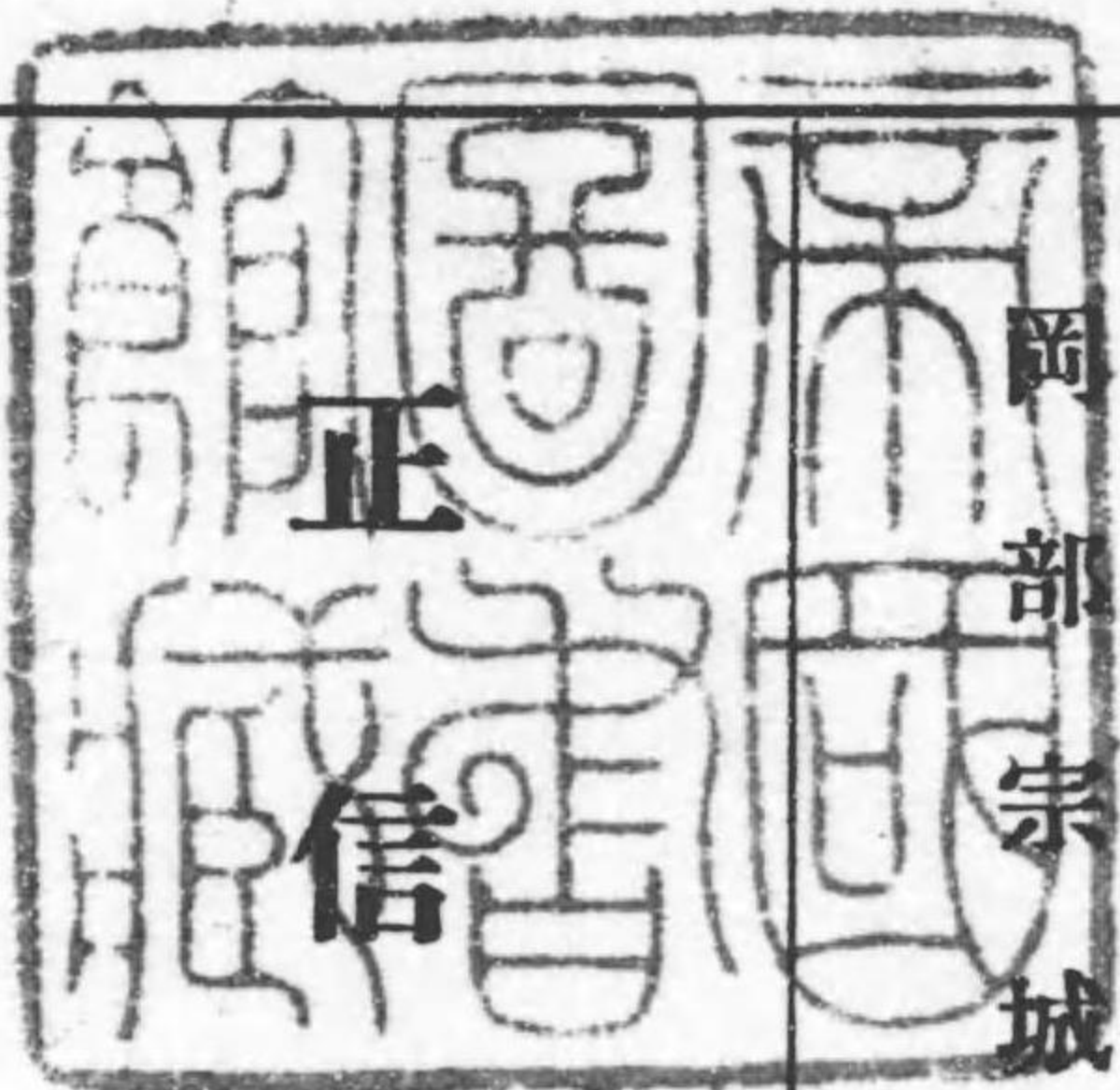
眞宗文書傳道會發行



始



特207
353



岡部宗城述

偈入門

發行所 眞宗文書傳道會



正信偈入門目次

第一講

正信偈の作者——法然上人——物多ければその値ひを知らず——一といふ文字——鐘が鳴るのか撞木が鳴るか——正信偈の位地——傳統と創造——正信偈讀誦のはじめ——讀誦したらどうなるか——正信偈の参考書

一頁

第二講

依經段——題號のところ——報謝ならざるものも報謝——法藏菩薩以下十八句——四諦八正道十二因緣——彌陀成佛の因果のまゝの衆生往生の因果——乳の所有權は子供——これから釋尊讚仰

二〇頁

第三講

能發一念から應報大悲まで——雲霧を透しての日光——彌次喜多の寓話——獲信見敬——難信之法——國に一人の喜び——七祖列名——七祖選定の三由——龍樹章

三七頁

第四講……………五五頁

天親菩薩——馬鳴菩薩のすゝめ——修多羅——回向のころ——一心五念——蓮華藏世界
——煩惱の林にあそぶ——曇鸞章——報土の因果——往還回向——煩惱なければ本願なし
——道綽章——三不三信

第五講……………六九頁

善導獨明——五部九卷——一字一句加減すべからず——定散逆惡——韋提希夫人——舉身
投地——三忍——源信章——源信和尚の生ひ立ち——源信和尚の母——往生要集——日本
の菩薩——正行雜行——專修雜修——われもまたと同列の攝取——源空章——源空上人の
生ひ立ち——法門を讚嘆せずとも人格讚仰——唯可信斯高僧說

餘講……………八六頁

後記……………八八頁

正信偈入門

岡部宗城述

第一講

正信偈の作者

正信偈は誰が作ったものであるかと申しますとそれは親鸞聖人のお作り
に成つたものであります。

親鸞聖人は承安三年四月一日、今の曆に推歩して五月二十一日に、日野
有範卿を父君に、源義家の孫にあたる吉光女を母君に洛東日野に御生誕な

らせられました。幼少にして御父母を失ひ、御歳九歳の折、時の 天皇の崩御にあはれ、無常を觀じた聖人は今一度御兩親に御會ひ申す世界がないであらうかと御出家なされたのでありました。

當時は出家に成ることが出世の一番捷徑であつた爲め、得度するものが非常に多かつたのでしたが、聖人の御出家なされたのは全く意味の異つたものでした——上御一人と雖も無常の風には逆ふことが出来い——と言ふことに御氣付きに成つての御出家でした。

此の世の中で何が樂しみと言つても兩親の揃つて居る程樂しみなものはありませぬ。又これに反して親の無い程淋しいものはありません。私は昨年父を失ひまして、皆さんから——淋しい正月だらう——と言はれますが沁々親を失つた淋しさを味つて居ります。

親の無い子と磯邊の千鳥

日暮れくくに袖しぼる

と言ふ歌があります。尤もな情緒を唄つたものだと感じさせられます。

御出家なされた聖人は御年十九歳迄専念に天台の學を修められ、續いてそれより前後二十年比叡山に血の出る様な眞劍な御苦行を御積みに成り一切經を三度迄讀破なされました。併しどうしても聖人の御心には眞如法性の月は輝かず遂に行詰つて仕舞ひました。思ひ餘つた聖人は、六角堂の觀音様へ百夜の祈願を込められ、毎夜く比叡山より六角堂へ、疲れ行く身心を上げまし、血のしたゝる足を引ずりつゝ、百夜の間通ひ續けました。併し百夜の満願となつても何のお告げも無かつた時の失望と落膽はどんなであつたでせう。

自分は幼にして親に見捨てられ今又此の觀世音にも見捨てられて仕舞つたのだ。

と死んでも死に切れない、生きるに生きられない苦惱を六角堂の向拜に俯して血を吐く思ひで泣くばかりでした。

此の悲痛な苦惱を抱いて失望の心やるせなく、比叡山にトボ／＼と歸路に着いた時パツタリ會つたのが安居院の聖覺法印でした。範宴さんじやないか、なぜその様に寔れて居るのです。聖人は偽らず自分の胸中の苦惱を訴へました。それを聞いた聖覺法印は、よく言つて呉れました、この聖覺も同じ惱みに泣いたことがありました。然し此の様な私の心から法性眞如の月を發見し様とした事が既に間違つて居るのです。私は毎日法然様の許へ通つて救はれて居ます。さあ一所に行きませう。とそのまま、法然上人の

許へ連れて行かれました。

聖人の過去二十年の苦しい歩みと今の裂ける計りの胸中の惱みを聞かれた法然上人は、あなたにさう聞かされると私の胸も迫つて來ます。あなたの胸中は十分に察せられます。併しあなたの考へは間違つて居る、救つて下さる親様はあなたの後に立つて居られるではないか。

あなたがそんなに苦しんで居る時、あなたの後で百千倍血の涙で哀れな者よ、汝一心正念にして直ちに來れ、我能く汝を護らん。とお呼び通してはないか。此の眞實の親様を置いて何處を探し廻つて居るのか。とお念佛諸共に、諄々と彌陀のお救ひをお説き聞かせに成りました。首うなだれて靜かに聞かれて居た聖人は何んなに驚かれたこととせう。

此の徹底した如來の救ひ聲を聞かれるや否や、二十年間の苦みの雲がか

らりと晴れ、御傳鈔にもある如く

立どころに他力攝生の旨趣を受得し、飽まで凡夫直入の眞心を決定しまし
しくけり。

と、實に美はしく聖道門を抜け出でられ、淨土門に歸入なされたのであり
ます。

六

法然上人の人となり

此の法然上人とは如何なる方かと申しますと、十五歳の御時に御出家な
され、四十三歳迄に一切經を七度迄も讀破なされた方で、四十三の年始め
て南無阿彌陀佛を見付け出されたのであります。一心專念彌陀名號の文字
を見付け出すと同時に、總てを擲つて此の六字で救はれるとは何と言ふ有

難いことだらう。

と何とも言へぬ喜びに浸りました。

物多ければその値ひを知らず

私共は生れ出ぬ前から眞宗に流れを汲ませて戴いて居り乍ら、未だに尊
い六字の價值を知らずに居ります。

物多ければその價值を知らずの譬へ、空氣や水にも感謝したことがあり
ません。勿體ないことです。

明治の時代ですが愚庵と言ふ名高い和尚がありました。此の人は父母を
尋ねて諸國を廻つて奈良の東大寺迄やつて參りました。そして東大寺の向
拜に立上つて、

七

まさきくてもませ父母みほとけの

八

恵みの末に會はざらめやも

と、併し親鸞聖人は、自分を捨て、行く親は何にも成らない。最後迄自分を捨てない親は無いものかと心付かれた所にほんとうの尊さがあるのであります。

一といふ文字のとうとさ

聖人は、何事に付け一と言ふ言葉を使はれてありますが、私達は何うしても一と言ふ考へになれません。皆と一所に聞くのだ……又明日も聞かれる。と横着な考へに成ります。

聖人は、

彌陀の五劫思惟の本願をよく／＼案ずれば、ひとへに親鸞一人が爲めなりけり。

とあります。聞かせて戴くは、今將に此時なり、此の一座なり、御救ひ下さるは彌陀御一佛なり、誓願一佛乘、一佛名、一誓願、一乘海と、一と言ふ御考へに成つて居られます。毎日鳴つて居る彼の鐘にしましても、鐘は此の私に撞木は佛に聞かせて戴くは將に此の時、ゴーンと撞く、その響きは往生一定御助け治定と鳴つて居るのであります。

鐘が鳴るのか撞木が鳴るのか

鐘がたゞ下がつてゐても鳴らない。撞木がぶら下がつてゐても鳴らない。鐘は私一人です。撞木は御助けくださる阿彌陀如來御一佛です。聞か

九

せて頂くは今まさに此時と撞木をうんと引いて鐘に突きあてるとき初めて響くのであります。一と一と一の三拍子揃つたときに往生一定御助け治定の鳴り音の高い響きになるのであります。聖人の御氣持はつねに此外を出でなかつたのです。鐘が鳴るのか撞木が鳴るか鐘と撞木が合へば鳴る、聞法の軌則として心得べきことであります。

聖人は御年九歳の時に御出家なされ、御年二十九歳の時に聖道門をすて、浄土門に入り、いはば出家の法衣をすて、着物に着換え、三十一歳の御時に師法然上人の御媒酌に依つて、九條兼實公の御息女玉日姫と御夫婦に成られ、茲に始めて家庭の宗教を御開きに成つたのであります。

眞宗は實にこゝから生れた家庭の宗教であります。聖人三十五歳の時、法然上人其他二三の方々を罪なくして流刑に處せられました。そして五年

の後御赦免の勅詔が發せられ再び京へ上る途中、師法然上人の御往生を御聞きに成りまして、再び京へ上る意を翻へし、念佛を知らない北陸や關東の人達に如來の慈悲を傳へねばならないと、歎きに沈む御心を振ひ興しそのまゝ、越後に止まらせられました。

此の里に親の死したる子はなきか

御法の風になびく人なし

それ以來色々と御難儀を重ねられて諸所御布教遊ばされました。その結果此の北陸、關東の地にも段々と信者が多くなり、なごやかな日が續きました。

佛法弘通の本懐の成就した喜びは古今を論じませぬ。蓮如上人の御歌にも「ごとくと船ばたたゝく吉崎の、波の上にも彌陀たのむ聲」といふの

があるやうにそれは法悦の境地の上に一層の愉悅を感じられたものでありませう。

併し聖人は五十二歳の御時、即ち元仁元年關東は稻田草庵に法然上人の拾參回忌を迎へ、靜かに御考へになりました。自分は斯うして、越後關東に布教して御同行も殖え、次第に御念佛を稱えて呉れる様に成つた、併し何時迄此の念佛のこえが續くであらうか。

と、後世に残すものが必要であると御考へに成つて、此處に始めて教行信證を書き始められたのであります。此れが我淨土眞宗の柱石であるところの御本典であります。

正信偈の位地

此の教行信證の行卷の終り信卷の始めに、六十行百二十句の正信念佛偈を御作りに成りました故に、正信念佛偈は教行信證の一部分であるとも言へますが、此の正信念佛偈を作りて曰く、と特別に作られたものでありますから、別個のものと拔出して考えても差支ないのであります。

此の正信偈と教行信證との關係を見ますと、先づ

三法とは教、行、證、

四法とは教、行、信、證、

六法とは教、行、信、證、眞佛土、化身土、

今學問上の事は暫く預りまして味ひの上から見ますと、聖人の一番問題とされた所は、即ち信ずる者は救はる、疑ふものは助からぬ、と言ふことで、稱へれば救はるゝ、只稱へればと言ふ行Ⅱを判然する爲め、眞佛眞土

(第十八願)と化身化土(第二十願)を區別なさつて、第十八願の人の参る所と、第二十願の稱へて参る所と別々であることを御指示下されたのであります。

傳統と創造

昔から學者は、教行信證の中の信卷のみを大事にして居る様に見えますが、信卷のみでなく信卷より始つて化身土に終る迄がいはゞ聖人の御己證といふて創造の骨であります。従て教、行は法然上人より相承したる傳統の御相承であり、信卷より化身土卷迄親鸞聖人に依つて新しく發見された、即ち御創造の卷であります。

そして前の教卷行卷と後の信卷以後化身土卷との蝶番ひとして此處に正

信念佛偈なるものを御書下しなされたものであります。そして信卷以下と雖も勝手に親鸞が言ふのではない、釋迦金口の法門であるぞと御相承遊ばせられた事を言つたものであります。即ち教行信證と正信念佛偈とは以上の様な關係のものであります。

正信偈讀誦のはじめ

何時頃から讀始めたものかと申しますと、第八代目の蓮如上人の時からて存如上人迄は一日に六度六時禮讚を讀んで居たのでしたが、此の六度を朝夕二度にして六時禮讚の變りに六首の和讚を引いて讀んだものであります。節も眞、墨、舌々、中拍子、草の五通りに成つて居たものを、近來に成つて、

眞譜 本山のみ

行譜

草譜

本山と地方と共用

に換へられました。

讀誦したらどうなるか

然らば此の正信偈を讀んだら何うなるかと申しますと、蓮師の御一代聞書の三十二章に、

一、のたまはく「朝夕正信偈、和讃にて念佛申すは往生のたねになるべきか、なるまじきか」とおの／＼坊主に御尋ねあり。皆申されけるは往生のたねになるべしと申したる人もあり、往生のたねにはなるまじ

きといふ人もありけるとき、仰に「いづれも悪し、正信偈、和讃は衆生の彌陀如來を一念にたのみ參らせて後生たすかり申せとの理をあそばされたり。よく聞わけて信をとりてありがたや／＼と聖人の御前にてよろこぶことなり」とくれ／＼仰せ候なり。

とある如く、明け暮れ讀ませて戴いて信を取らねばなりません。かへす／＼お聞かせにあづかるは私一人、聞かせて戴くは今まさに此時、御助け下さるは阿彌陀如來たゞ御一佛。と三拍子揃へ聽聞に心を入れねばなりません。私共の聽聞は籠に水を入れるとおなじで直ぐ水が洩りますと蓮師にまうしあげたら、その籠を水につけよ、聽聞に心を入れなばお慈悲にて候間信を得べきなりと仰せられました。誠に心すべきであります。

正信偈の参考書

一八

尙正信偈の参考書を二三まうしあげます。

第一は存覺上人の六要鈔です。第二は金ヶ森の道西の請によつて出来た蓮如上人の正信偈大意であります。その後に出来たものは汗牛充棟です。しかも千紫万紅色とりくものがあります。中に前田慧雲勸學の正信偈講義があります。これは私の恩師でありましてそのまた講義が實に達意的のものであり、簡潔平明のものであります。東京の光融館から出版され春秋社から出た全集の中にもあります。それに島地大等勸學の正信偈講義があります。これは明治書院から出た先生の全集眞宗大綱の中に編輯されて居ります。私の今度お話をまうす分は大方この島地先生のお講義に負

ふところが多いのであります。

第二講 歸命無量壽如來 應信如來如實言

歸命無量壽如來より唯可信斯高僧説迄の六十行百二十句を昔から次の様に分けて居ます。

- 一、依經段
 - 歸命無量壽如來ヨリ
 - 難中之難無過斯マデ
 - 印度西天之論家ヨリ
 - 唯可信斯高僧説マデ
- 二、依釋段
 - 四十四句
 - 七十六句

依經段は三部經の御心によりて作れるもの、依釋段は三國の七高僧方の御講釋に依つて作られたるものであります。又依經段を次の様に分けられて居ります。

- 一、總讚
 - 歸命無量壽如來
 - 南無不可思議光
- 二、別讚
 - 法藏菩薩因位時
 - 是人名分陀利華
 - 彌陀佛本願念佛
 - 難中之難無過斯
- 三、結讚
 - 四句

題號のこゝろ

先づお話を進めて行きます前に、正信念佛偈と言ふことは如何なるものかと言ふことを御話しせねばなりません。正信念佛と言ふことは、信心正因、稱名報恩と言ふことで、偈とは伽陀といふて歌即ち御當流の御安心た

る信心正因、稱名報恩をはつきりせしめる爲めの歌と言ふことで

イ、正信念佛即只念佛して彌陀にたすけられまいらすべしとよき人

のおほせをかうむりて信ずる外に別の仔細なきなり。

ロ、正信の念佛即御廻向の念佛信心から流れる即ち稱えねば居られない念佛。

ハ、正信と念佛即正信と念佛。

と言ひ方を換えて見ましても、總て信心正因、稱名報恩をはつきりせしめる爲めに外ならないのであります。

『歸命無量壽如來』

南無不可思議光』

先づ南無阿彌陀佛の御六字を分つて見ますと次の様になります。

南無阿彌陀佛
無量壽—體—(歸命無量壽如來)
無量光—相—(南無不可思議光)

無量光とは用きでありすがたであり盡十方無碍光であります。和讃に、

十方微塵世界の 念佛の衆生をみそなはし

攝取してすてざれば 阿彌陀と名付けたてまつる

と廣く申せば盡十方、こまかく申せば微塵世界どんな所も至らぬ處なしと言ふことであります。

總て物には、體と相と用との三つを備へて居ります。そこで西洋人の佛教學者は阿彌陀如來をライフであり、ラブであり、ライトである、即ちスリーエルスだとまうしてゐます。

歸命とは、歸は歸依、命は命令、即ち命令に歸依することて彌陀から言

へば命令になり、私から言へばすがる心持であります。

報謝ならざるものも報謝

そもく私共の常に稱へる御報謝の念佛は清浄なものでせうか。不浄な私共の口から出る御念佛は決して奇麗なものではありません。此處にこうして毎朝早起して御座を重ねて居られるは成程殊勝な様に見えますが、草鞋がけて此の六角堂に血を吐く思ひで通はれた御開山に比べると毛氈敷いて火鉢かゝえて御恥しい次第ではありませんか。どう考へて見ましても私共の念佛は何等御報謝に成りさうにはありませんが、これを親様に向けると御報謝に成るのです。

腕白小僧は何う考へても親孝行者には見えませんが、昨日迄百日咳で腕

白も出来ずに居たものが、今日は元氣に成つて此の様な腕白者に成つて呉れたかと、親の方に持つて行くと、そのまゝが親孝行に成るのです。如來様は私の此の御念佛を、御報謝として受取つて下さるのであります。即ちながい／＼おいのちを持たれ限り無き智慧の光で此の私を御救ひ下される如來に御すがり申すと言ふことであります。

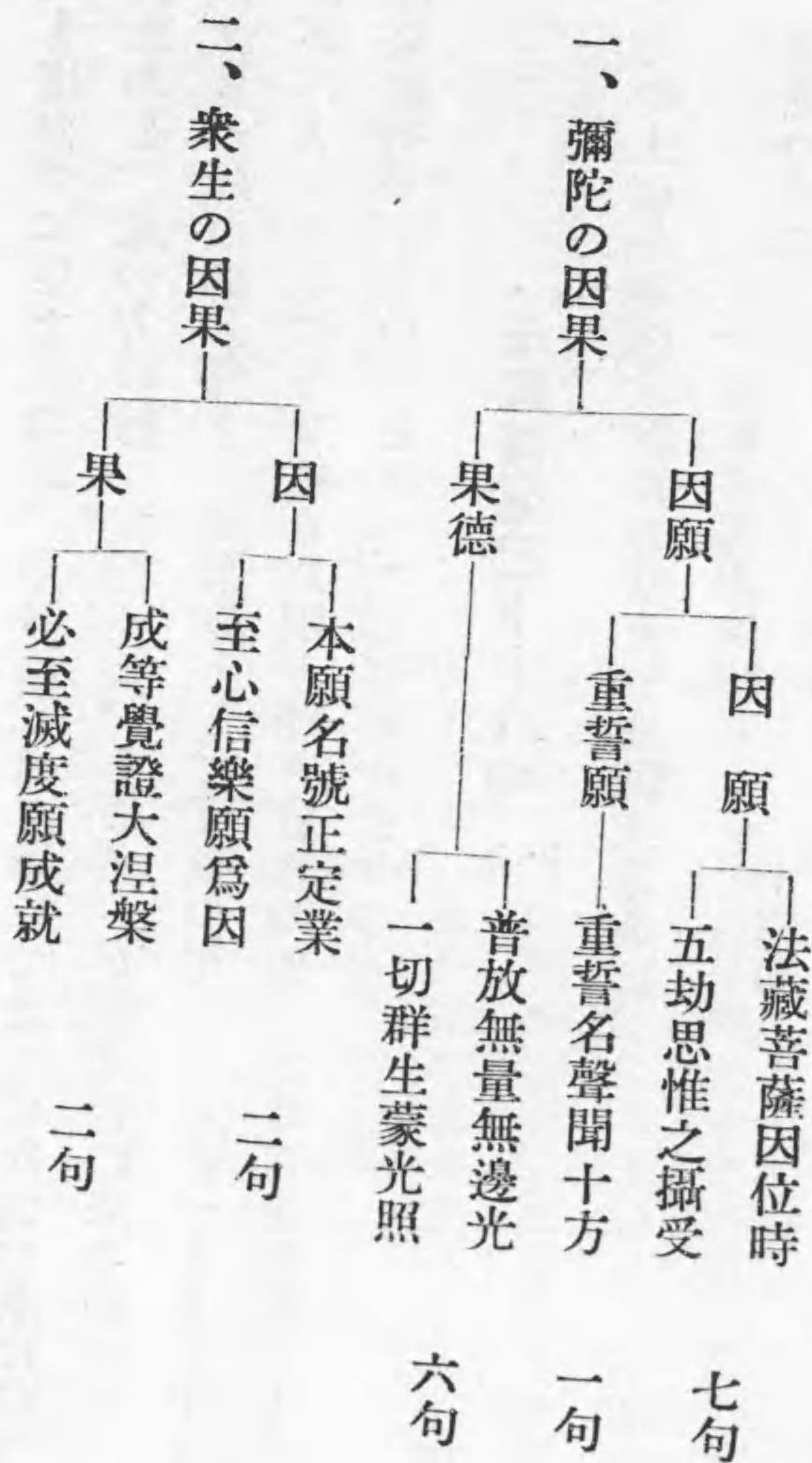
法藏菩薩已下十八句

次の法藏菩薩因位時から必至滅度願成就迄は、

彌陀の因果	法藏菩薩因位時
一切群生蒙光照	十四句
本願名號正定業	
衆生の因果	四句

「必至滅度願成就」

の二通りになつて居りまして此の因果を圖に示せば次の如くなります。



法藏菩薩は、從果降因の菩薩と申しまして元來は久遠の如來様であるのであります。何とかして衆生を救はんものと數々因に降り數々果に上ぼる只一度ではなく、衆生の爲めに度々法藏となり度々如來とならせられた菩薩であります。

我々と如來との關係を考へさせて戴きますと、私は古い／＼昔からの凡夫であり、彌陀は久遠の佛であります。

私は久遠の古凡夫

彌陀は久遠の古佛

古いことでは同じこと

私と佛とは親子であり、然もそれがおないどしの親子であります。即ち佛は私の迷ひ始めた時に生れられたのであります。

そこで法藏菩薩は師世自在王佛の教へに従ひ、

『諸佛淨土の因

國土人天之善惡を親見して

無上殊勝の願を建立し

希有の大弘誓を超發せり』

と作り上げられたのであります。こゝにも他力がはつきりしてゐませう。法藏菩薩一人の力でなく師世自在王佛の教によられたところが、實に他力の濫觴です。願とは何とかして救つてやり度いと願ひであり、誓とは若し救ふことが出来なければ彌陀も諸共に蓮臺には乗らぬ、諸共地獄に落ちると言ふことであります。

然らば此の願は簡單に出来上つたのかと申しますと、五劫に之を思惟し

て攝受す、と仰せられてあります。

五劫とは數へ切れないう永い時間であり、攝受とはおさめ受取ると言ふこととて永い／＼間かゝつて國土人天の惡を去り、善をとり納め、悪い所の一つも無い立派な淨土を築き上げたと言ふことであります。そしてその上に

『重ねて誓ふらくは名聲十方に聞えん』

と重誓願を立てられたのであります。名とは名前であり、聲とは御聲であります。光明の働きて私を育て下され、そして御救ひ下さるのであります。

光明とは即ち熱と光と言ふことであります。總て如何なるものも此の熱と光に依つて育てらるゝものであります。石にひしがれた雜草さえ濫い太陽の光と熱に育まれ、太陽に向つてスク／＼と延びて行きます。惡業煩惱

にさいなまされる私共も、此の彌陀の慈悲の光にこそ育てられるのであります。

『普く無量、無邊光

無碍、無對、光炎王

清淨、歡喜、智惠光

不斷、難思、無稱光

超日月光を放ちて塵刹を照らす

一切の群生光照を蒙る』

これは十二光を示したものであります。佛法では如何なる宗旨にしましても、

一、四諦

二、八正道

三、十二因縁

の三つを無視することは出来ません。その十二因縁とは、

一、無明 先の見えないこと

二、行 さきの見えないまゝ、實行すること

三、識 それを智識にする

四、名色 形に現れる

五、六處 六感の働き

六、觸 ふれる

七、受 うける

八、愛 愛着する

- 九、取 うけとる
 十、有 所有する
 十一、生 うまれる
 十二、老死 死ぬる

以上かくの如く私共は常に迷ひに迷つて居ります。此の迷ひを十二光に依つて一つく皆消して下さる姿を言つたものであります。

彌陀成佛の因果のまゝの衆生往生の因果

本願名號は正定の業なり。即ち本願の名號は正しくわれ等の極樂參りに定つたと言ふことで、いはゆる業事成辨で悉く出來上つたと言ふことであります。然らば何うすれば參られるかと申しますと、至心信樂の願を因と

す、たゞ往生が先方に出來上つただけでは參られぬ、至心信樂欲生と私のものに成つて始めて參らせて戴くことが出来るのであります。

乳の所有權は子供

女の胸に付いて居る乳は、女の肌が付いて居る故に女の持物である様に思はれるが、實は生れた小兒が持主なのであります。小兒が生れなければ無用の長物に成つて仕舞ひますが、小兒が生れ、生れたその子が乳を腹一杯吸つて始めて役立つものであります。

彼方に出來上つた南無阿彌陀佛も、至心信樂欲生我國と腹一ぱい吸つて血と肉にして始めて役立つものであります。

此の腹一ぱいに吸はせて戴いた時、即ち等覺の位に成つたのであります。

す。聞かせて戴く迄は五十二段目の最下位に居た私が、一足飛びに五十一段の等覺迄昇らせて戴くとは腑に落ちない。聞かせて戴いてもやはり憎い、可愛い、ほしい、おしいの心が起るのにと思はれませうが、かくあるそのまゝで等覺の位であります。何となれば疑の根元を立切つたからであり、不退轉であり、先の見えすいた決して後戻りしない姿であるからであります。親鸞聖人が

久遠劫より今まで流轉せる苦惱の舊里は棄て難く未だ生れざる安養の淨土は戀しからず候ふことまことによく／＼煩惱の興盛に候こそと仰せられ、又、

佛かねてしろしめして煩惱具足の凡夫とおほせられたることなれば……と言はれたのは等覺の位であります。

名残惜しく候へども娑婆の縁盡き力無くして終るとき彼の土へは參るべきなり。

と顯智上人や、彌女様其他二三の人々に守られて、念佛諸共御往生なさつたのが親鸞聖人であります。これは等覺の現益滅度の當益を示されたのであります。

これから釋尊讚仰

『如來世に興出したまふ所以は、

唯彌陀の本願海を説かんとなり』

とは和讃に、

久遠實成阿彌陀佛、五濁の凡愚をあはれみて

釋迦牟尼佛としめしてぞ、迦耶城には應現する

とあります。釋尊世に出でまされ種々御經を説かれましたが、私には他のものでは參られない、此の彌陀の本願より他に參るべき道のない私に取つて考へて見ますと、何うしても此の本願を説く爲めにのみ御出世に成つたとしか考へられないと言ふことであります。依つて

『五濁惡時の群生海』

應に如來如實の言を信ずべし』

と御諭し下されたのであります。

第三講

能發一念喜愛心
應報大悲弘誓恩

『能く一念喜愛の心を發せば』

煩惱を斷ぜずして涅槃を得』

喜愛とは歡喜愛樂と言ふことで、一念とは歡喜初後と言ふ題下の研究であります。我々は何時も喜びづめて居られるかと申しますと決してそうじやありません。併し喜びづめてはないがそれで良いのであります。等流相續と言つて何時思ひ出させて戴いても、往生一定、御助け治定と變らないのが歡喜愛樂の心であるのです。

私達は汽車に乗つて旅行して居りましても、何時も考へは變り通してす。駿河へ入れば富士山を思ひ、大井川を渡ればれんだい越の昔を思ひ出し、その時々で種々に思ひは變ります。併し汽車は此の私を乗せたまゝ、目的地

へどん／＼と引張つて行つて呉れます。御和讃の「彌陀の尊號となへつゝ、信樂まことに得る人は、憶念の信つねにして、佛恩報ずるおもひあり」此の憶念の信常にしてとは常磐の如く何時も變らぬ、何時思ひ出しても、往生一定御助け治定と變らないのが歡喜愛樂の心持であるのです。

煩惱を斷せずして涅槃を得るとは、私の方から斷つことの出来ない迷ひに迷つて居る者を如來の方から救はにや置かぬの御念力で斷ち切つて下されるのであります。

『凡聖逆謗齊しく廻入すれば、

衆水の海に入りて一味なるが如し』

凡とは六凡、聖とは四聖、逆とは五逆、謗とは謗法、是等の者皆等しく御信心に入らせて戴けば、其處には何等の區別もなく平等のお證りを開か

せて戴くのであると言ふことを説かれたものであります。

『攝取の心光は常に照護したまふ

已に能く無明の闇を破すと雖も

貪愛瞋憎の雲霧

常に眞實信心の天を覆へり

譬へば日光の雲霧に覆はるれども

雲霧の下明にして闇無きが如し』

攝取とは撮めると言ふことで、御和讃の攝取と言ふ字の左訓に、逃ぐるものをおさめとるを攝取とはまうすなりと振假名せられてあります。心光とは、色光に對するの言葉で色光とは眼に見える光、心光とは眼に見えない光と言ふことであります。彌陀の慈悲の光は常に私共をお守り下され、

總てに疑は晴れたけれど、貪愛瞋憎の雲が次々と絶えず信心の天を覆ひます。併し如何に此の貪愛瞋憎の雲が覆ふと雖も空に於ける太陽の雲に覆はるれど下界に闇無きが如く、慈悲の光はすみずみ迄行き渡つて下さると言ふことであります。東京に酒屋を営んで居る滋賀縣出の富豪が居りますが、最近此の人が胃癌に成りました。胃癌は不治の病として此の人も死は覺悟しては居りますが、金に飽しての養生に少しも衰弱は致して居りません。元來が本派の門徒ではありますが、大派の近角先生の話を聞いて後生を樂しんで居たのでしたが、近頃此の近角先生も動脈硬化症に胃された爲めにお話しを聞くことが出来なくなつて、淋しく過して居られました。偶々その知人の方が私の所を尋ねて來られて是非一度話をして呉れと言ふことでしたので一日御伺ひしました。苦しさうに伏つて居る御主人の前で色

々お話も致し聞いても見ましたが、此の人は宜く聞いて宜く解つては居ります。併し自分のものに成つては居りません。此の點を大そう御氣の毒に思ひました。判然りせねばならない、しつかりせねばならないと一生懸命に成つて居られるのです。其處で私は彌次喜多の話をしました。

彌次さんと喜多さんが東海道を上つて、江洲は瀬田の唐橋附近迄參りました。呑氣な二人は少々の道中錢も全く費ひ果して、今は一文無しに成つて宿の支拂ひさえ出来ない始末です。其處で二人は示し合せて朝暗い中にくつそり宿を逃げ出したのでした。もう大丈夫と思ふ所迄逃げ延びて、ホット一息ついた時、彌次さんの足にチリンと角判らしいものを引掛けました。

彌次さんは、そつと拾つて知らぬ顔で仕舞ひ込まんとした時早くも喜多

さんはそれを見付け

彌次さんく、水臭ひぞ俺とお前とは何事に付け共々に苦勞して來たの
じやないか、今お前は何か角判らしいものを拾つたらしいが、俺にも
半分とは言はぬよ三分一なりと分けて呉れよ。

と迫りました。彌次さんは

いやく、俺は隠したのじやない拾つたは確かに拾つたよ、併しこんな
所で出して見ろ、落した人が來たらどうする臺無しじやないか。

と喜多さんは成程と思つて、又仲良く元氣良く道を急ぎました。そして橋
の上迄參りました時、喜多八は

彌次さんく、一寸待つた。

と又前の拾つたもの、分配を迫りました、彌次さんは

又言ひ出したか、こんな橋の上などで出せるものか、路上でさへあれば
若し落し主が來ても左右へ逃げることも出來様けれど、橋の上で分配
などして居る所へ落主に出られて見ろ、逃げ場さへ無いじやないか。

是を聞いた喜多さんは、

成る程彌次さんは俺より一枚がた役者が上だ。

と感心し乍ら付いて行きました。そして此の二人がおでん屋の前迄來掛つ
た時、おでんかん酒の茶店がある。空き腹にブンとおでんの美味しさうな
匂ひを鼻がされて、今はもう我慢もならず、喜多さんは後から、

何とかしろよ。懷にあるじやないか。

とせき立てるに彌次さんとても我慢ならず、終にお茶屋に入り込んで、久
振りに思ふぞんぶんに飲み食ひしました。

やがて御鳥目となつて彌次さん前に拾つた包みを包みの儘ボンと投出しました。

それを受取つた女將は中を開いて見て、さも嬉しさうに、

あら御親切にありが度うござぬました。昨日家の子供がこれを落して大そう悲しんで居りましたので世の中には御親切な人もあるよ、名前も刻み込んであるのだから、きつと届けて呉れるに違ひない、と宥めて居た所でした、ほんとうにありが度うござぬました。

と御禮を言はれてよく／＼それを見ればそれは子供の迷兒札であつたのでした。折角間に合ふと楽しんで居たものは迷兒札で、彌次さん喜多さん開いた口が塞がらなかつたと言ふ話が膝栗毛に出て居ります。この話を致しました所、此の人も始めて今迄の考への間違ひに氣付かれました。これで

す。毎日總會所へ參つて迷ひ兒札のみ拾はんとあせつて居るのです。はつきりせねばならない、しつかりせねばならない、と間に合はぬものを拾はふとあせつて居るのです。妄念は凡夫の自體なり、妄念のほかには凡夫はなきなりと仰せられてありますが、妄念も起らずはつきり解るならニツコリと笑つての日暮しばかりが出来る筈ですが、

御開山は「久遠劫より今迄流轉せる苦惱の舊里は棄て難く、未だ生れざる安養の淨土は戀しからず候ことまことによく／＼煩惱の興盛に候こそ」と仰せられ教行信證の信卷に、「一切の群生海、無始より已來乃至今日今時に至るまで穢惡汚染にして清淨の心もなく、虛假諂偽にして眞實の心もなし。」と示されて今日考へたら今日が今日今時、明日考へたら明日が今日今時、死ぬる夕べを考へたらやはり死ぬる夕べが今日今時、死ぬる夕べ迄色

々な事が氣に掛ると歎かれて居られます。併し乍らそれにもかゝはらず「譬へば日光の雲霧に覆はるれども、雲霧の下明にして闇無きが如し」聞かせて戴けば戴く程に尊い教へてある事に氣付かせて戴くことが出来ます。

『信を獲て見て敬ひ大に慶喜すれば』

即ち横に五惡趣を超越す』

解り易く言ひますと、佛の御姿を合掌するものになり、御慈悲を喜ばせて戴く身分に成れば、横に一足飛びに五惡趣を飛び超える事が出来ると言ふことで、次の

『一切善惡の凡夫人』

如來の弘誓願を聞信すれば

佛は廣大勝解の者と言へり

是の人を分陀利華と名づく』

如來の弘誓願、即ちそのまゝぞと言ふことを信ずることが出来れば、佛は廣と（ひろく）大と（大きく）勝と（すぐれる）解と（わかる）者との給ひ、此の者を泥中の蓮華なりと讃めて下さるのです。

世の中に何が解つたと申しましても、御慈悲で後生の解つた位、良く物の解つたことはありません。御慈悲を喜ぶ人を此の様に迄讃めて下さるのではありませんから、それに報ゆる様な日暮しをさせて戴かねば御恥しい次第ではありませんか。

『彌陀佛の本願念佛は』

邪見憍慢の惡衆生』

信樂受持すること甚だ以て難し』

難の中の難斯に過ぎたるはなし』

四八

此の四句は依經段の結讚でありまして、此の彌陀の尊い本願念佛を邪な見方をしたり、憍慢な頭を下げることを知らない、正しくない見方をするものは、信樂受持することは甚だむづかしいと言ふことであります。阿彌陀經には「難信之法」と説かれてあり、此の様にやさしい法が何うして此の様に六ヶ敷くなるのかと申しますと、それは邪見な憍慢な惡衆生であるからであります。蓮如上人は、護法の行者は國に一人郡に一人しか無いぞよ。と仰せられてあります、そこで私共の喜ばせて戴かねばならない事は、此の邪見な憍慢な私を聞かせて戴くまでに、御廻向下さつたことであります。そのまた國に一人の人にして頂いた仕合せを喜ぶべきであります。又蓮師は坊主程の大罪人は無いぞ。御佛飯を引いては生きて居る鼠と變る

所は無いぞ、お前の粗末にして居る落紙一枚と雖も皆佛のものではないか。この大罪人なればこそ片時も傍を離して成るものかと坊主に生れさせて下さつたのだぞよ。と仰せられてありますが、御恥しい次第であります。

御開山は「彌陀の五劫思惟の願をよく／＼案ずればひとへに親鸞一人が爲なりけり、さればそくばくの業を持ちける身にてありけるを助けんと思召したちける本願のかたじけなさよ。」と御述懐なさつて居られます。

斯の如く戴いて見ますと、難中の難斯に過ぎたるはなしの御句の尊さを泌々と味ふことが出来るのであります。

さてこれから御話するは依釋段と申しまして、三國即ち印度、支那、日本、三國に互る七高僧の御講釋に依つて作られたるもので、七高僧とは、

一、龍樹菩薩

印度

四九

- 二、天親菩薩 印度
- 三、曇鸞大師 支那
- 四、道綽禪師 支那
- 五、善導大師 支那
- 六、源信和尙 日本
- 七、源空聖人 日本

の七高僧のこととあります。では何故に此の七高僧に限つて御選びに成つたかと申しますと、傳燈相承と法の燈火を次から次へそのまゝ傳えた菩薩人師であるからであります。然し乍ら御開山は次の三つの約束から外れては如何に尊い方々であつても、決して此の祖師の中へは御加へにならなかつたのであります。それは、

- 一、自督安心即ち念佛を擴めても自分に信心の戴けてゐなければならぬこと。
 - 二、利他悲行他人の手を取つて導き共々に他力回向の本願の大道を行かねばならないこと。
 - 三、永久性の文獻、書いて残して下さつた書物を永久に、誰もがそれによつて信を得しむるものでなければならぬこと。
- 此の三資格を具備した高僧に限つて相承の祖師となさつたのであります。

『印度西天の論家』

中夏日域の高僧

大聖興世の正意を顯はし

如來の本誓機に應ずることを明す』

大聖世尊の正しい御教を正しく顯はし如來の本誓機に應ずることを明す
と言ふことであります。

『釋迦如來楞伽山にして

衆の爲めに告命したまはく南天竺に

龍樹大士世に出て、

悉く能く有無の見を摧破し

大乘無上の法を宣説し

歡喜地を證して安樂に生ぜんと

難行の陸路の苦しきことを顯示し

易行の水道の樂しきことを信樂せしめ給ふ

彌陀佛の本願を憶念すれば

自然に即時必定に入る

唯能く常に如來の號を稱して

大悲弘誓の恩を報ずべしといへり』

龍樹菩薩は龍猛菩薩とも譯されて、釋尊滅後五〇〇年位に出て來られた
方で衰微せる釋尊のお説を良く廣めた人で、八宗の祖師とも申されて居り
ます。

釋尊の楞伽經に、佛法は今後五〇〇年位で衰微するが決して心配するな
よ龍樹が出て又廣めるぞよ、と仰せられてあります。有無の見とは、

有の見―人間は人間に生れる

無の見―死せば火の消えた様に無くなる

と言ふ見方を言ふのであります。

米を蒔けば米が出来るに定つて居るが、人間が死ねば又人間に生れるとは限つて居らない。何となれば俵を蒔いた所で決して俵は生えません。

俵の俵に成り、人間の生れ出て来るには、生れ出る様な因縁がなければ生れないものであるぞよと摧破なされ、大乘無上の法を宣説し歡喜地と云ふは、五十二段の中の四十一段の位に昇られて遂に安樂淨土へ御生れに成つたのであります。そして陸路の苦しきこと、水路の楽しきことの難行易行の二道を示され、只彌陀の本願、即ち第十八願に依りて自然に即時に何のはからひなしに信じたその時、正定聚不退轉の位といふ決して後もどりしない位に成るのだもの唯能く大悲大弘誓の御恩を報ぜよ——と仰せられたといふことであります。

第四講

天親菩薩造論說
所有衆生皆普化

『天親菩薩は論を造りて説かく』

無碍光如來に歸命し奉ると』

天親菩薩は世親菩薩とも譯し、千部論師とも名付けられてゐます。元來は小乗の學者で大乘の尊さを知りませんでした。兄に馬鳴菩薩と言つて大乘學者が居られました。馬鳴菩薩は、弟の天親菩薩の大乘を知らないことを大そう御心配になり或時假病をつかつて、天親菩薩を迎へにやりました。兄様の病と聞いて駈付けた天親菩薩は、元氣な馬鳴菩薩を御覽に成つて不審に思はれました。馬鳴菩薩は、病は俺ではないお前の病氣だよ、お前の小乗病だと、種々大乘教を御説きに成つて、御諫めに成りました。御聰明

な天親菩薩は、兄菩薩の諄々としてのお諭しに、忽ち今迄の小乗を御捨てに成り大乘佛教に御歸依なされ、以來大乘の法門にお這入りに成られたのであります。此の大乘佛教の中でも、此の淨土論こそ天親菩薩の腹底であり、大乘佛教の極致であることを見付け出されたのが親鸞聖人であり、そして此の天親菩薩を第二の祖師として崇められたのであります。淨土論は天親菩薩の御製作であり、即ち天親菩薩は此の淨土論をお作りになつて物として照らさざるなき無碍光如來に歸命し奉り、

『修多羅に依りて眞實を顯し』

横超の大誓願を光闡し』

修多羅とは梵語にてお經と言ふことで縦糸は千万年を貫いて居るから、お經と言ふのであります。横の糸は綾に色々變化はあつても縦には變りな

い、即ち新しい學説が出て、釋尊の思想には何等の差障りの無いことを言つたもので、此のお經即ち淨土三部經に依つて眞實を顯し縦に一段々では、五十二段迄昇るには、とてもかなふまいから、横に一足飛びにお證りを開かせて下さる大誓願を現はし、

『廣く本願力の廻向に由りて』

群生を度せんが爲に一心を彰したまふ』

廻向とは、まわし向はしめると言ふことでありまして、衆生から如來の方へ向ふことは何れの宗旨にもありますが、天親菩薩の言はれたる本願力の廻向とは、衆生から如來様へ向ふのではなくて阿彌陀様の廻向であり、他力と言ふことであります。他力とは本願力であり、こちらからでなく如來様から私に向けて下さることでもあります。此の御本願力の廻向に依つて

群生を度せんが爲めに一心を彰したまふ。一心とは五念と言つて、

禮拜——身業

讚嘆——口業

作願——意業

觀察——智惠

廻向——利他方便

此の五念を一括して一心と言ふのであります。即ち衆生を度せんが爲め此の一心を御示しに成つたと言ふことであります。

『功德の大寶海に歸入すれば

必らず大會衆の數に入ることを獲』

此の五念の備つた一心、總て納め入れてある南無阿彌陀佛に歸入すれば

必らず大會議場に入ることが出来ると言ふことで、大會衆とは和讚に、「彌陀初會の聖衆は、算數のおよぶことぞなき、淨土をねがはん人はみな、廣大會を皈命せよ」とある如く、念佛行者の大會の場所で、即ち此の大會の仲間入りをすることが出来る、と言ふことであります。

『蓮華藏世界に至ることを得れば

即ち眞如法性の身を證せしむ

煩惱の林に遊びて神通を現じ

生死の藪に入りて應化を示すといへり』

蓮華藏世界とは極樂即ち淨土の異名で、此の淨土へ至ることを得れば、此身はあさましい凡夫に違ひは無いが眞如法性身——彌陀同體の證りを得ることが出来る。併しその證りを得てそのまゝかと申しますと、左様では

ない、行つた私が又出直して來るのである。何處へか。それは煩惱の林。即ち此の凡夫の娑婆へ。神通力を以て自由自在に出直してお釋迦さま同様の働きをすることが出来ると言ふことで、此の往相還相の御廻向が、五念一心備つた働きであります。

『本師曇鸞は梁の天子』

常に鸞の處に向つて菩薩と禮したまへり』

曇鸞大師は支那の方で、梁の武帝が常に菩薩として、禮拜して居た程の方であると言ふことであります。此の曇鸞大師は或時病氣に掛られたのが動機で、長生きをしたいとて、長生きの仙術に没頭して居られた方です。そして菩提流支に長生きの方法を尋ねられました。その時流支は、一體何年位生き度いのか、どうせ長生きしても、此の世では百年二百年と

は生きられまいが、と觀無量壽經を説いて聞かされました。是を聞いて始めて判然りと御證りに成り、仙經を焚燒して樂邦に歸したまひき、と仙術をお捨てに成り仙經を焼いて仕舞はれたのであります。

『天親菩薩の論を註解して』

天親菩薩の御作りに成つた淨土論を註解し給ひ、往生淨土論註上下二卷を御作りに成つて、

『報土の因果は誓願なりと顯はし給ふ』

報土とは報ゆる土、即ち因願酬報の淨土と言つて只出來上つたお淨土ではない。誓願に酬いられたお淨土でありますから、私が只參れるのではない。貴方の御念力が私に届いて信心の戴けたもの、かゝるものと氣付かせて戴いた者のみが參るのだぞよ、と御示し下さつたと言ふことであります。

す。

『往還の廻向は他力に依る

正定の因は唯信心なり』

教行信證の始めに、謹んで浄土眞宗を按ずるに二種の廻向あり、一には往相、二には還相、とある如く此の往還二回向は浄土眞宗の骨髓であります。

天親菩薩の言はれた廻向と曇鸞大師の示された此の、往相、還相即ち浄土論と往生浄土論註には我親鸞聖人が如何に魂を打込んで居られたかは親鸞の二字に依つても伺ひ知ることが出来ます。親鸞の親は天親菩薩の親であり、鸞は曇鸞大師の鸞を取つて自ら親鸞と名乗らせられたのであります。

此の往還の二廻向は他力に由る。他力とは本願力の事で即ち往還二廻向は本願力に由る。私の力ではないぞ皆本願力の御廻向であるぞ、そして参

れる因は只信心によるのみと仰せられたのであります。

『惑染の凡夫信心發しぬれば

生死即ち涅槃なりと證知せしむ

必らず無量光明土に至れば

諸有の衆生皆普く化すといへり』

生死即涅槃、煩惱即菩提、惑に汚れた凡夫のまゝ生死の迷ひそのまゝがおさとりであり、煩惱なければ彌陀の本願は無いのだぞよの尊い御示してあります。

『道綽は聖道の證し難きを決し

唯浄土の通入すべきことを明す

萬善の自力勤修を貶し

圓滿の徳號專稱を勸む』

道綽禪師は曇鸞大師の滅後二十五年位に出られた方で、或時玄忠寺の境内にある曇鸞大師の御墓の碑文を讀んで大そう御感じになり、涅槃經ではとても駄目だ、これからは淨土論註に依らねばならない。と御覺悟なさつた時には感激のあまり、碑石が動いたと言ふことであります。道綽禪師の尊い所は即ち自力と他力を判然りなさつた所でありまして、聖道とは聖者の道で、私共凡夫ではとても行く事の出来ない道で、聖道難證、淨土易往、と明らかにして下さつたのであります。

何でも良い事をして極樂へ參ることなど、お前達にはとても出来ないことだから止めよ、何もかも總て、六字の名號の中に仕上げてあるのだ。蓮如上人の御文章に、「それ南無阿彌陀佛と申す文字は、その數わづかに六字

なれば、さのみ功能のあるべきとも覺えざるに、この六字の名號の中には無上甚深の功德利益の廣大なること更にその極りなきものなり、されば信心を取るといふもこの六字のうちに籠れりと知るべし、更に別に信心とて六字の外にはあるべからざるものなり。」總てが籠つて居るぞ、出来ない行は止めよ、されば良い事をしては悪いのかと申しますと、決して、悪くはない出来るならやれ、何故止めよと申せばやつてやり通せることの出来ないことは止めよ。出来ないことと只それ丈けて済まされるなら宜敷いが、又やれなかつたか、と歎く姿を此の彌陀は見るに忍びないぞよ。そんなやり通せない事は何うか止めて呉れよ。そして稱へ易い御念佛を稱へよ。行住座臥、そのまゝ救ふの御約束じやもの、自力を止めよとお諭し下さつたのであります。

『三不三信の誨慇懃にして

像末法滅同じく悲引したまふ

一生惡を造れども弘誓に値ひぬれば

安養界に至りて妙果を證ぜしむるといへり』

三不三信とは、

一心

決定心

相續心

不の字を付けければ三不となり不を除けば三信となる。和讃に、

不如實修行といへること 鸞師釋してのたまわく

一者信心あつからず 若存若亡するゆえに

二者信心一ならず 決定なき故なれば

三者信心相續せず 餘念間故とのべたまふ

三信展轉相成す 行者心をとどむべし

信心あつからざる故に 決定の信なかりけり

決定の信なきゆえに 念相續せざるなり

念相續せざるゆえ 決定の信をえざるなり

決定の信をえざるゆえ 信心不淳とのべたまふ

如實修行相應は 信心ひとつにさだめたり

此の御心持を言つたもので、此のぐる／＼廻り廻つたものが一心に成り、一生惡を作れども、御淨土に至りて彌陀同體の御證りを開かせて戴くのであると言ふことで、これが自力、他力を御示し下された尊い御教へて

あるのであります。

第五講

善導獨明佛正意
唯可信斯高僧說

『善導獨り佛の正意を明かにし

定散と逆惡とを矜哀して

光明名號は因緣なりと顯したまふ』

善導大師は五部九卷の御聖教を作られた人で、五部九卷とは觀無量壽經を御講義なさつたものであります。

此の御聖教を書く時は、如來を勸請申し上げて、科段即ちくぎりを切つて戴いたと言ふことで、故に一字一句加減すべからずと判然り本文の中にお書き加へに成つて居られる位であります。從來觀無量壽經の御講義は幾らもなされてありますが、それ等は表面的な講義でほんとうの底を流れて

居る觀經の眞意は判然りして居りませんでした。是を善導大師に依つて觀無量壽經は、隱彰顯密の御經であることを判然りなさつて下されたのであります。奥底には、光明遍照十方世界、念佛衆生攝取不捨の尊い御教への潜んで居ることを見付け出されたのであります。即ち從來の觀無量壽經の見方を覆へして、現にこれ罪惡生死の凡夫曠劫より已方常に没し常に流轉して出離の縁あることなし。と機の深信を現はしたるは獨り善導大師の大手柄であるのであります。定散と逆惡とは、

定——息慮凝心

散——散亂麤動

逆——五逆

惡——十惡

と言ふ事で、是は機の方を現したるもの、善導獨り佛の正意を明かにし、と法の方を明かにし、定散と逆惡を矜哀して、と機の方を現はし、此の十惡五逆、五障三從の凡夫を哀れに思召し皆一所に救つてやるぞよの思召しであり、光明名號はその因縁で即ち光明は母であり、名號は父である。何うして助けるのであるか。それは南無阿彌陀佛の六字の呼びごえて。さらばどうして此の六字の名號で助けるのか。それは光明のお照して。〔どんなものでも明るい方へ〕と延びて行くものである。〔此の光明に育てられ、延びて行つた私を南無阿彌陀佛の御名號に依りて救ふぞよ、と言ふこととであります。〕

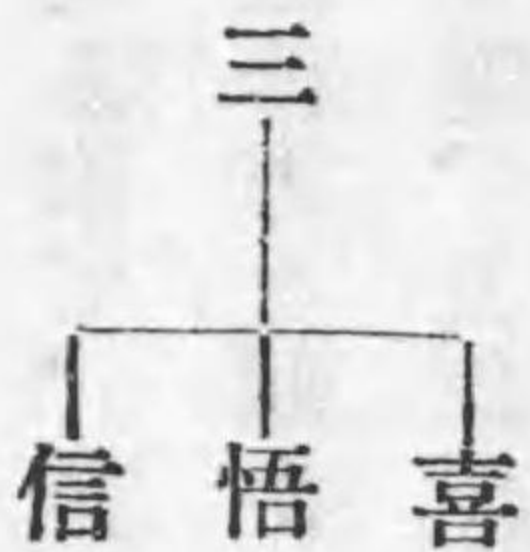
『本願の大智海に開入すれば』

行者正しく金剛心を受け

慶喜の一念相應して後
韋提と等しく三忍を獲

即ち法性の常樂を證ぜしむといへり』

斯の如くして本願の大智海に入れば金剛心を受くと言つて此の金剛心とは、善導大師の方では、金剛の志と御説きに成つたものを御開山が字句の都合で金剛心と縮められたもので、私の力で決して壊すことの出来ない、金でない、鐵でない、固い／＼金剛石の信心と言ふこととあります。此の金剛の信心を得て慶喜し韋提と等しく三忍を獲るとは、



忍——忍可決定

の三忍で、韋提夫人は、自分は一國の後である。併し后であつても髪の本一本動かすことも顔の皺一筋も如何うすることも出来ない。それを后だと威張つて居たのだと、我子の爲めに牢獄に押込められて氣が付いたのでした。そして牢屋で冠を地上にたゞき付け、着物を引裂いて嘆かれた後釋尊に救ひを求めたのでした。私の様なものでも參られる所があるのでせうか。目に悪人を見ず、耳に悪聲をきかず、と此の苦衷の訴へ方こそ、眞劍な訴へてした。その時釋迦は、お前の望む所は何れか。さあ御覽!!と諸佛の御淨土を見せて下さつたのでした。その時韋提はあれ／＼と一つのお淨土を指さしました。それこそ阿彌陀如來のお淨土であつたのでした。それを見られた釋尊は、能く氣が付いた、彼の土で無ければお前の參れる淨土

は無いのだ。と認可決定を與えられ、それと同時に法性之常樂、常に變りの無いお證りをお開きに成つたのである。そして又今念佛の行者も其の通りと御教示下さつたのであります。

『源信廣く一代の教を開きて

偏に安養に歸して一切を勸む』

源信僧都は今から千年程前の方で、惠心僧都と言はれた方であります。幼少にして父を亡ひ母の手一つに育てられました。或時旅僧が小川で椀を注いで居るを見られて、今少し上流の方は奇麗ですから、左様せられては如何です。と教へました所彼の旅僧は、上流へ行つても水は淨穢不二で變りは無からふよ、と答へました。それを聞いた源信僧都は、きれいなもきたないも同じならば洗つても洗はなくとも同じではないか。とやり込めた

と言ふこともあります。これ程に利口な方で、二十餘歳の時天子様にお經の講義をしたことがありました。その時に天子様から白羽二重を頂戴致しました。大そう光榮に思つて母君に喜んで頂かうと早速母君の許へ届けました。母は押載いて後、そのまゝ使に持たせて返して仕舞ひました。

我はほんとうに後世の大事を安心して貰ひたかつたから、お前を出家にしたのです。それに何ぞ名聞利用の僧に成つてゐるとは残念です。お前が母の手を引いて、共々に後生の大事に安心出来る迄はもう使もいらぬ使もいらぬ。

と此の母性愛の尊さに、全く心を入れ換えた僧都はそれから一生懸命となり終に往生要集六卷を著したのであります。而して此の往生要集六卷の御聖教を支那に送つた時、支那の高僧達は大そう驚かれたと言ふことであり

ます。

佛の説かれたものを經と言ひ、菩薩の説かれたものを論と言ひ、人の著したものを釋と言ひますが、此の往生要集を釋の段に仕舞つて置けば、何時の間にやら論の中に混つて居り又釋に置換えれば何時か又論の中に入つて居たので是を知つた高僧達は、日本の菩薩に違ひ無いと敬めたと云ふこととであります。

往生要集六卷とは何をお書きに成つたものであるかと申しますと、地獄の苦しい有様と、極樂の楽しい姿を詳しく知らせて下さつたものであります。

或時宮中より地獄の有様を畫に書いて呉れとの乞に應じて、地獄の畫を書き下して献上された事がありました。その畫は非常な残忍なもので、女

官達は一と目見て戦慄し畫中の鬼が毎夜々々異様な物音を發して、とても置く事が出来なかつたさうで今猶此の畫は、國寶として残つてあります。又極樂を書くに至つては、今古の名文で極樂の莊嚴を判然りと書かれてあります。此の源信僧都が往生要集を御作りに成つて我々を導き給ひ、

『專雜の執心淺深を判じ』

報化二土正しく辨立したまふ』

前句は因を説き、後句は果を現したもので、專雜とは善導大師の正行、雜行の二つ、即ち正行とは、

讀誦——三部教を讀ませて戴く

觀察——淨土を觀察する

禮拜——如來を禮拜する

稱名——名號を稱へる

讚嘆——お徳を讚嘆する

雜行とは是に對する言葉で、正行は救はるけれど雜行は救はれないのであると言はれた。此の第四の稱名に專修と名付けられたので、稱名は讀誦、觀察、禮拜、讚嘆を全く一纏めに包んで居る。御六字中には總てを取纏めてあるから別々に行ふことはいらぬと御示し下さつたのであります。そして此の稱名以外の前三後一の四つを雜へて行ふことを雜修と御嫌ひに成つたのであります。雜行雜修とは此處から出た御言葉であります。

斯様に專修と雜修を判然りとして下さつたのであります。かゝる故に極重惡の凡夫よ只稱名念佛せよ、との御意であります。

『我も亦彼の攝取の中に在り』

煩惱に眼を障へて見たてまつらずと雖も

大悲倦きことなくして常に我を照らしたまふ』

御和讃に、

煩惱にまなこさへられて

攝取の光明は見ざれども

大悲ものうきことなくて

常に我身を照らすなり

此の和讃に依らせて戴きますと判然り味はさせて戴くことが出来ます。此の御和讃も大そう有難く戴くことが出来ますが、私は我亦在彼攝取中と御加へくだされてあるのを何とも言ひ様のない有難さに咽びます。

我も亦龍樹、天親、曇鸞、道綽、善導、源信、源空の七高僧と共に攝取の光明の中にあるぞ。正信偈を作られたは御開山讀ませて戴くは此の私、

歸命無量壽如來

南無不可思議光

極重惡人唯稱佛

我亦在彼攝取中

と讀ませて戴く、此の私も亦彼の攝取の光明の中にあり、九十年の間辨圓の刃の下に、左衛門の雪の褥に、御苦勞なされた御開山も法然上人も皆私と共に彼の攝取の光明の中にあり、煩惱に眼さえられて、攝取の光明は見ざれども大悲ものうきことなく、常に我身を照らすなり。これに今一つ復輪かけて、我亦在彼攝取中と、

親鸞も、蓮如も、お前も、と一列に並べて下さつてお救ひ下さるのだぞよ、と斯様に聞かせていたゞくと、何とかしなければなりません。極重惡人只念佛すべし、佛恩報謝の御念佛を稱へさせて戴くことが此の尊いお言

葉に對しての御報謝であります。

『本師源空は佛教に明かにして

善惡の凡夫人を憐愍し

眞宗の教證を片州に興し

選擇本願を惡世に弘めたまふ

生死輪轉の家に還來ることは

決するに疑情を以て所止となす

速に寂靜無爲の樂に入ることは

必らず信心を以て能入と爲すといへり』

源空上人は法然上人の事であつて、父親は戦死なされ、その時の遺言で僧侶に成られた方であります。和讃に、

源空三五のよはひにて

無常のことわりさとりつゝ

厭離の素懷をあらはして

菩提の道にぞいらしめし

とある如く、御出家なされたは十五歳の御時でした。源空和讃を戴いて見ますと、さきの六祖に對しては種々に其の法門を讃えてありますが、源空上人に限つてあまりにも其の法門を讃えて無いのは御開山に如何なる思召しがあつての事でありませうか。

私は雜誌眞宗の世界に高僧和讃全體に就いて味ひの上から書ひたことがありませんでしたが、源空和讃の終りに、

阿彌陀如來化してこそ

本師源空としめしけれ

化縁すでにつきぬれば

淨土にかへりたまひにき

とある如く、御開山は法然上人を彌陀の化身と崇められました。今法然上

人を讃嘆するには、龍樹菩薩より源信僧都に至る六高僧を讃嘆せねば法然上人は出て來ないのであります。各々六高僧の法門

一、龍樹菩薩——難行易行

二、天親同——一心歸命

三、曇鸞和尚——往相還相

四、道——綽——聖道淨土

五、善——導——正行雜行

六、源——信——專修雜修

を御讃嘆申して來ましたが、法然上人の場合は御和讃にある通りその人柄だけを讃嘆したは御開山は如何なる御つもりでしたせうか。私は此の人柄だけを讃嘆して法門を言はない所が尊いと思ひます。即ち人柄を讃え、

この御方が私の師であるぞ、今親鸞のすゝむる信心正因、稱名報恩の法門はそのまゝ、師法然上人の法門であるぞ、と無言の大雄辯であると思ひます。此の法然上人が選擇本願念佛集を御書きになりて浄土眞宗を弘められ、要は何かと申せば、生死輪轉の迷ひは疑であるぞ只信ぜよ、と御諭し下さつたのであります。

『弘經の大士宗師等

無邊の極濁惡を拯濟したまふ

道俗時衆共に同心に

唯斯の高僧の説を信ず可し』

大士とは菩薩と言ふこととて弘經の菩薩方はこんな濁つた世界をお救ひに成つたのである。唯能く此の高僧方の御説を信ぜよと、迷へる私達の道し

るべを御知らせ下さつて、煩惱に眼さえられて攝取の光明見えざれども、大悲ものうきことなくして常に我を照らしたまふ。而して

我亦在彼攝取中、與韋提等獲三忍、

と一體に並べて下さつての尊い御慈悲であることに氣付かせて戴いたら、毎朝毎晩、歸命無量壽如來南無不思議光と讀ませて戴く度毎に、御開山の御苦勞をしのび、かゝるものと御報謝の御念佛の日暮しさせていたゞくのが、浄土眞宗に流を汲まさせて戴いた所詮であります。

(了)

前來舒べ來つたところは眞に祖師の思召の九牛の一毛にも足りない。誠に冒瀆の甚しきものを恐れる。然しながら第一講を以て總體をかたり、第二講を以て依經段をかたり、第三講を以て印度の二祖、第四講を以て支那の三祖、第五講を以て日本の二祖をかたりおはる苦心を大方に祭して頂きたい。七祖のくわしい傳記を物語りたくもあり、出版に際してそれをも加へたい念願はもつてゐたが、何分いま東京築地の復興に没頭してゐる私には出來さうに考へられない。今年の降誕會に間に合せたいとおもつてゐたがそれすら間に合はない。今年九月六日は先考の大祥忌に相當する。せめてその大祥忌には杜撰をがらも報佛恩の一端に擬するためこの一篇をさゝ

げたい。嚴考は實にこの御正信偈を日夕讀誦拜戴せられたる如實の信奉者であつたからであります。

七祖の傳記は更めてさらにいふか書くかしたい念願を持つてゐることを申添えておきます。

(昭和九年五月十六日東京築地の寓居にて記す)

後 記

八八

一、本書は昨年一月二十一日より二十五日まで、京都六角會館に於てなしたる眞宗講座五日間の談片を由良秀雄君の筆録を煩はしたるもの、印刷校正に關しては二場實俊君の勞に負ふところなり。深く兩君に感謝す。

一、本書固より識者にすゝめんとするものにあらず、たゞ同講座聴講の方々により、もとめらるゝまゝ、同信同侶の方々によするもの大方の叱正を乞ふ。

一、余さきに佛敎入門眞宗入門の著（何れも京都西六條興敎書院發行）あり併せ讀まれんことを願ふ。

（東京築地の僑居にて）

著 者

.....正信念佛偈

正信念佛偈

題號

本文

依經段

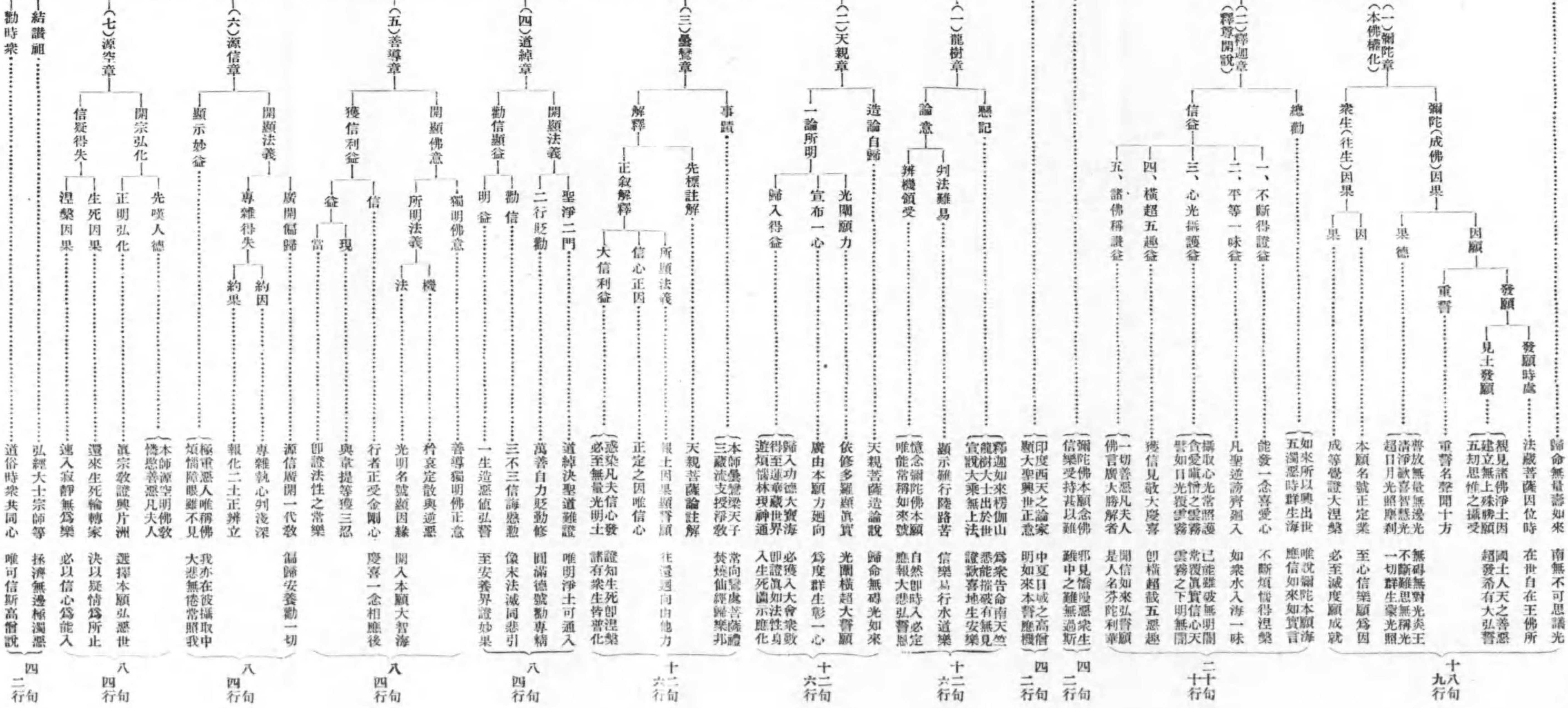
依釋段

總說

別說

別說

結勸



正信念佛偈

合計百二十句六十行

昭和九年七月五日印刷發行

定價金參拾錢

編輯兼
發行人

岡部宗城
東京市京橋區築地三丁目一番地

印刷人

五島林太郎
東京市中野區新井町三三三六番地

印刷所

豐多摩刑務所
東京市中野區新井町三三三六番地

發行所

眞宗文書傳道會
東京市京橋區築地三丁目一番地築地本願寺內

頒賣所

山喜房
東京市本郷區大學赤門前
興教書院
京都市西六條

終

